

「MR の存在意義」

石黒直彦（日本イーライリリー株式会社 営業本部）

人と接する仕事で大切なことは何でしょうか？

この問いに私は、相手がまたこの人と仕事をしたい、この人の話なら聞いてみたいと思ってもらうことだと答えます。

MR として 15 年の経験を積みましたが、2 年前のある出来事が蘇ってきます。

新薬の説明会で、いつも通り疾患の疫学、患者像、お薬の薬理、使い方などを紹介しました。説明会自体はいつもより質問が多いなと思いながらも、具体的な使い方についての質問がたくさん出て、程よい緊張感と疲れの中終了しました。後日、社内の同僚から、「この前の〇〇薬の説明会が今まで聞いた中で一番分かりやすく、改めてここに書くと、〇〇薬とはこういうもので、だから他の薬剤とはこういう点が違っていて、、、」とブログに書き込みがあったのを見つけ私に知らせてくれました。これまで何十回、何百回と説明会をやってきましたが、このような形で自分の仕事を評価されたことは初めてでした。ある意味今の時代らしい形ですが、直接言われるよりも正直とてもうれしかったことを覚えています。

この経験から私は三つのことを学びました。

一つは、相手に伝えることと伝わることは違うということです。命に関わる仕事であれば尚更、相手にしっかりと製品の特徴や注意すべきこと、対応方法などの情報が生きた形で伝わって初めてお薬が正しく使われ、評価されるものだと思います。その意味でこの出来事から私は、相手に正しく理解されることの大切さを学びました。

二つ目は、インパクトを与えることです。特別声を荒らげるわけでもなく、笑いを入れるわけでもありませんが、製品を自分なりに理解し、時には具体例を交えながら、相手の立場に立って、実際に処方する時のことをイメージしてもらい、製品を扱う上で大切だから知っておいて欲しいと思うことを、自分の言葉で丁寧に、そして誠実に話すことです。

三つ目は、思いです。私は自社製品が大好きです。この会社にいるからということ抜きにして、もし自分の家族がこの製品の対象疾患になったら、迷わず処方してもらいます。お薬の先に患者さんはいます。常にそれを意識しながら、何がその人にとって必要で、デメリットは何か、でもこう使ってくれたらその人の治療ゴール達成にお役に立てるのではと考え、時には他社の薬剤も提案しながら、すべては患者さんのために熱い思いを持って伝えられるかどうかだと思います。

今回の募集を知り、改めて MR 認定センターのホームページを見ました。先達の高い志を持った活動は、まさに MR という名にふさわしい、医薬品、薬学に関連する情報を、医師が有効に、安全に使えるために自信をもって伝える、そしてそれが自社製品の普及につながるという信念の上の行動であったのだと深く感銘を受けました。良く言われる「生命関連製品」や「患者さんのために」といった言葉は、MR という職種が日本に生まれたときに既にベースにあったこと

は、とても心を動かされました。

自分の行動に当てはめて考えてみると、いくつかの出来事が思い浮かんできます。MR になって初めて先生から「あなたの説明を聞いて患者さんに使ってみましたよ」と教えてもらったこと。糖尿病のサマーキャンプに参加して、実際の患者さんと接して多くの勇気をもらったこと。精神科を担当したころ、先生に病棟を案内してもらい、あの人は君のところのお薬を使って閉鎖病棟からこの開放病棟に移ってこられた人だよと教えてもらったこと。印象深い出来事がたくさんあります。どれも今の自分ができるまでにはとても貴重な経験だったと思います。

これらの貴重な経験をこれからの MR 像と重ね合わせて考えていくと、やはり一番は患者さんのためにという大原則を外すことはできません。その上で、いかに先生に分かりやすく伝え、MR と面会したいかと思ってもらうことが必要になってきます。

最近インターネットで情報は取れますし、会社もインターネットを介した情報提供に力を入れています。取り巻く業界もネットを介して、先生が欲しい時間に欲しい情報を手に入れることができる環境を整えています。忙しい先生があえて MR から情報をもらう必要性が薄れてきているのが現状です。そんな中でも会いたいと思える MR になるためには、より分かりやすく、相手の立場になって考え、信頼を得ていく必要があります。そうすることで初めてベストパートナーになれるのだと思います。

会社の最終面接で、あなたは MR としてやっていく自信はありますかと尋ねられた時に、「自信はありません」と答えたのを覚えています。ただ、「MR という仕事を通じて患者さんの役に立ちたいという気持ちがあればやっていける自信が付いてくると思います」と答えたのも覚えています。今でも勉強の毎日です。MR を介する意味や付加価値とは何かを考え、単なる情報を生きたものに変えるために、日々研鑽を積んでいきたいと改めて心に誓いました。